釣れ釣れなるままに

２０１４年思い出の釣行記 PART.　９

釣った魚は必ず持ち帰りましょう

鹿島釣狂

この圧倒的な面構えを見よ

オノドリの大カジカ

平成二十六年度第五回大会が冬島港～東洋港の区間で九月二十一日に開催された。岩見沢では、特別大雨警報のために避難勧告が出されるなど、不安定な天気が続いていたが、当日は絶好の釣り日和となった。

九月の大会は、まだまだアブラコやカジカの岸寄りは見込めず、アカハラを主体とした釣りを覚悟しなければならないだろうか。昨年は、エリモ港でアカハラ四本を取ってから、夕日が丘、日勝大和へと向かったがカジカ一本に終わってしまった。他会の成績をみると、襟裳の先端で若干良い兆しが見えるものの、他は芳しい報告は聞かれない。今回の潮は、現地に着いた時が満潮で、干潮は七時半の５０㎝となっている。せっかくの襟裳だが潮の引いた岩盤に乗っていられるのは、ほんのわずかで、前に出られたとしても昆布取りの舟を避けながらの釣りとなることは必至だ。

そう考えていると、吉田潤一氏から電話が入った。大会に参加したいが、一緒に連れていって欲しいというものだ。彼はアカハラ釣りや港の釣りを敬遠しているのだが、どこでも良いと言う。様々なことを勘案して、今回はオノドリ岩に乗ることにした。

「岩見沢とんとん会」七月大会が延期されていたが、バスの手配が付かずに、私たちのバスに乗ってくれることになった。大会なので、人数が多ければ多いほど闘志が湧いてくるのに加えて、バスの中が華やいだ雰囲気になるので大変ありがたい。そして、これはいつものことなのだが、バスに乗り込んでからも、皆さんどこに下りようかと悩んでいる様子で情報集めに必死である。私は、吉田氏に「オノドリ岩」と告げてからは迷いがない。

オノドリ岩に着いた時には若干潮が残っていたが、オノドリ岩の高い所には出ていける状態だった。釣り人は誰もいない。吉田氏には、安全を期して右の湾洞で潮待ち時間を過ごすように言ってから、私は付近の様子を見て回った。しかし、吉田氏はいつまでたっても竿を出さないで私を待っていた。その頃は何処でも竿を出せる状態になっていたので、まずは吉田氏に正面の出岬に案内してから、私は左の湾洞で竿を出してみた。一投目に小カジカとハゴトコがダブルで来た。しかし、ハゴトコは来るのだが大物の気配がない。目の前に出てきた露頭岩のせり出しが気になったことと、足場が悪かったこともありその場に見切りをつけた。

バスの中でオノドリ岩を得意とする矢根氏が勧めてくれた左の盤には、潮がまだ高くて渡っていける状態にない。吉田氏が打っているさらに右側の高い岩に乗ってみる。しかし、目の前に赤い旗が一本見え隠れしていた。暗闇に目を凝らして見るとそれがあちらこちらに浮かんでいる。網を付けたボンデンだろうか。沖が開けて釣りやすそうに見えるが、さらに旗の無い右の岩に釣り場を設定した。そこで、４０㎝程のカジカが来た。あとはアブラコが来ればと打ち返したが、これといった釣りものの無いまま時が過ぎていった。

目の前を磯船が行ったり来たりする。私はほんの手前にちょい投げした。

周りが明るくなり、さあこれからがアブラコタイムだと、見えだした沖根を狙って打ち込んでいた。しかし、それも六時のサイレンと共にできなくなってしまった。昆布取りの舟が海上に集結してきたのだ。近くの漁港や舟揚場から出て来たと思われる何艘もの昆布取り舟が、エンジン音もけたたましく舳先をあげて猛スピードでそれぞれの昆布場に向かって行く。私が打っていた根の周りにも３艘の舟が近づいてきたので、慌ててリールを巻いて仕掛けをあげた。磯舟は、５０ｍ先に連なる離れ岩のまわりで昆布取りを始めた。

吉田氏の所には磯舟が入っていないので様子を見に行った。すると、彼がアブラコを釣ったとバッカンを開いて見せてくれた。彼がこんな大物は初めてだというだけあって、５０㎝超えと思われるモノが海水を張ったバッカンの中で尾鰭をグニャリと曲げて収まっていた。遠投はしていないと言う。

期待が持てるかもと、私も目の前の磯周りに仕掛けをちょい投げしてアタリを待った。青草も程よく繁っている。その手前右に打っていたところから良いアタリが出た。ガクンと一気に竿先をしめこむカジカのアタリだ。大物だ。足場の高い所に一気に抜き上げるのが心配になり、右方向の一段低い岩に回り込みながら、干潮で磯周りに残った昆布の上を滑らせて取り込んだ。

吉田氏が駆け寄ってきて言った。「いいカジカですねえ。私のアブラコより一回り大きいです。しかし、私は嫁のタカノハを釣り上げましたよ。」またまた、吉田氏のバッカンを覗き込むことになった。やはり４０㎝程のタカノハが大アブラコの横で鰭を打っていた。そ

して吉田氏は、「あんたのおかげで今日はよい釣りをさせてもらった。これで満足だ」と早々に後片付けをしてオノドリ岩から自衛隊前バス停への急坂を登って行った。

私は、今度は一本バリのタカノハ仕掛けに替えて、磯舟の隙間を狙って遠投した。しかし、そこは昆布取りの舟道になっているらしく、昆布を満載に積んだ舟がスピードを上げて舟揚場に向かった。慌てて仕掛けを引き上げて間一髪のところで間に合った。その後も、そこを磯舟が行ったり来たりするので、もう遠投はできないと諦めてしまった。結局、近間ではハゴトコが竿を揺らすだけで大物のアタリは出ず、私も十時まで続いた昆布取りの舟を後ろにして、標高３３．４ｍのオノドリの急坂を登って行った。

とんがり帽子を被せてメルヘンの世界を想わせる自衛隊前のバス停

優勝者は吉井氏で、暗いうちは西東洋舟揚場を転々としながら良型カジカを順調に揃えていた。そして、潮が引いてからエンドモ岬に渡り、昆布漁の磯船を避けながら大物アブラコを引き抜いてきたのだ。彼はこれで年間優勝争いのトップに躍り出た。

準優勝者は、私と一緒にオノドリで下りたゲストの吉田潤一氏であった。私も誘った手前、一安心する。吉田氏はアブラコとタカノハの大物二本だけを審査に提出した。ハゴトコやカジカを放さないで持って来ていれば優勝できる点数だった。

三位岡氏と四位西川氏は、例のように得意の坂岸で下りて行った。そして、それぞれが良型カジカにアカハラを嫁に提出した。残念ながら今回待っていてくれるはずのアブラコは、昆布取りの舟の沖に去ってしまっていたようだ。堀内氏が日勝大和では初のタカノハ

を釣り上げてきた。いつもは日勝大和で大アブラコや大カジカをモノにしてきたが、今回はタカノハだった。私はカジカで身長優勝を果たすことができた。

九月に入ったとはいえ、昆布取りが十時まで行われた。これまで長雨が続いて漁が出来なかったが、昆布を干すには絶好の天気になったので、時間を延ばしたのだろう。昆布干し場の熱く焼けた石原では、子どもたちもお手伝いをしている姿があり、微笑ましく思えた。私たちにとってはたかが遊びだが、漁師はこれで一年の生計を立てているのだ。私たちは海や磯場を汚さない様にして、子々孫々の世代まで豊かな海を引き継いでいきたいものである。

左から準優勝：吉田潤一、優勝：吉井博、身長優勝：筆者、３位：岡英成

サケ釣り協奏曲

河口の入り口に立てられた看板。「釣った魚は必ず持ち帰りましょう」には、様々な議論があるところだと思うが、私は賛成である。

九月二十五日に増毛町箸別へサケ釣りに行った。一年に一回のサケ釣りをこの日と定めて、先月の内から予め休暇を入れていたのだ。あいにく台風十六号が温帯低気圧に変わって北海道を通過し、大雨の予報が出ていた。釣行をどうするかと躊躇したが、平日にせっかくの休みをとっていたのを無駄にはしたくないと出かけることにした。幸い天気予報が小雨模様に変わり、波もあまり高くならないようだ。何より雨を嫌って釣り人が少なくなるのが場所確保の意味でも好都合なのだ。

丁度、息子も休暇なので誘った。釣り道具の方は私が準備することにして、運転の方は息子に任せた。女房も運転は息子の方に分があると安心している。午前一時に床から起き出して、午前三時半には箸別川に架かる橋の袂(たもと)に着いた。そこで一旦荷物をおろし、息子には五百mほど離れた駐車帯に車を置きに行ってもらうことにした。「忘れ物はないのか」と念を押す息子に「大丈夫だ」と言ってはみたが、激しくなってきた物忘れが心配で、もう一度車の中を確認すると、やはり竿を下すのを忘れていた。息子が駐車帯に向かい、一服付けようとするとポケットの中に煙草がない。慌てて息子の携帯に電話して、ダッシュボード脇に置き忘れていた煙草を持って来てもらった。息子には「これだから年寄りは困る」と窘(たしな)められた。

霧雨模様の河口には先客が四名いた。その隣で場所を確保して準備する。息子にはセッ

トものの釣り竿とリールを渡した。ルアーは息子に選ばせたのだが、四年前に彼が初めてシャケを釣り上げた実績のあるオレンジに黒玉模様のヘリンコンビをチョイスして、早速投げ始めた。それを切っ掛けにして、河口側に入っていた釣り人達もウキルアーを飛ばし始めて、チカチカと点滅する赤い光が暗い海面に浮かんだ。私は自作していたフカセ用のハリをドングリウキに繋いで遠投に心がけて流した。なにせ今日は釣り人が少なくて、左から右に流れる潮にいつまでもウキを乗せていられるのだ。

すぐにサケが掛かった。しかし、そのサケは、三年ものの小型の雌ですんなりと手にすることができた。そしてまたすぐにアタリが出て今度はグングンと竿を伸された。四年ものの銀ピカの雄だった。息子がサケを掛けた。そして「重い、重い」と後ずさりしていたが、もうそれ以上は下がることもできなくなった。根掛かりだったようだ。近間には根が連なり、早巻きしてルアーを回収するようにと言い聞かせておいたのだが、コツコツとアタリが続いていたので近くまで我慢していたようだ。

私のウキフカセの竿を息子に渡す。私も息子のセットものの道具にウキフカセを準備して釣りだしたのだが、どうもうまくいかない。竿が軟らかすぎる上に道糸がナイロン四号なので遠投が効かないのだ。何とか遠投できるようになって、コツコツとアタリが出た。道糸をフカシ気味にして食い込みを待つとグゥインーと竿先が入り、サケが掛かった。大物だ。ナイロン道糸なので何度か竿を煽って針先をサケの顎に食い込ませてから引き寄せた。何度か沖に向かって走られたが、いよいよゴロタ場に引き上げようとした時に、サケの方も最後の踏ん張りを見せて強力を発揮する。竿を一気に伸されて道糸が切れてしまった。どうも八年前に使用したナイロン糸をそのまま使っていたので、ナイロンが劣化していたか傷がついていたかしたのだろう。

すっかり明るくなってきたので、今度はアワビブルーのルアーに取り換えてみた。ウキフカセよりも遠投が効くようになり、広範囲を狙うことが出来る。私たちの目の前に鮭が溜まり、サケの背びれが見え隠れし、時折華麗な横っ飛びのジャンプを見せてくれるようになった。

息子がサケを掛けた。引き上げるとこの日一番となる大物だった。ブナがかっていたが、今日の目標である一本が来て満足そうな笑みを見せてくれた。

今日はこれで満足だ（４年ぶりとなる人生５本目のシャケ）

私の方のウキルアーにはさっぱりアタリが出ない。飛距離は落ちるが、また自製ウキフカセに取り換えて、今度は赤エビを付けてみた。その時は、ほんとに目の前をシャケがもじっていたのだ。掛かった。先程あったようなナイロン糸の劣化が心配になり慎重に引き寄せた。周りに釣り人が多ければオマツリして迷惑をかけてしまうので強引にでも取り込まなければならないところを、今日は釣り人がほとんどいないのでゆっくりと時間をかけることができたのだ。息子にも赤エビを勧めとすぐに掛かった。息子が目標を上回る二本も釣ったので、少し休憩をとっておにぎりを頬張ることにした。おにぎりの中身もゲンを担いで焼きサケと筋子が親子で入ったものだ。

河口にいた人たちも勤務があるのか、帰ってしまった。それぞれがサケを二、三本手にしていた。するとサケが溜まっているところが私たちの目の前から徐々に移動していき、河口の前に集結し出した。河口には新しく来た釣り人がいたが、私も仲間に加わらせて頂いた。人が少ないのでサケの背びれが見え隠れしている所を直撃することが出来るのだ。対岸のテトラの先に漂い始めたサケのモジリの中にウキフカセを飛ばした。そのウキの周りをサケの背びれが通過する。そのうちにその背びれがウキ付近で留まり、ウキにコツコツとアタリが出た。そしてそのウキが横に引かれた。その引きに強く合わせるとグーンと重みが乗った。銀ピカのオスで、私の今日一番の大物だった。

今日一番の大物　釣り人も帰ってしまって閑散とした河口

その河口周辺に漂っていたサケの塊が、今度はウキフカセでは届かない沖に去ってしまった。それで、重みのある５０ｇ赤ブラーのウキルアーにチェンジしてその沖目にある塊を狙った。掛かった。大物だ。そのサケが干潮で河口の前に出てきていた露頭岩の向こうに回り込み、その岩に道糸が擦れてしまった。鈍い感触がした。サケはルアーを咥えたまま沖に疾走していった。

最初に使っていたウキフカセドングリにチェンジした。今度は河口から沖へと流れ出る潮にウキを流しているとそのモジリの中にウキが届いた。すると、今度は何の前触れもなく一気に竿が伸されてそのまま沖に向かってサケが疾走する。ジー、ジーと今日初めてドラグが鳴った。錆びついたリールなのでドラグの調整が効かなかったのだが、何度かあったサケとのやり取りの中でドラグ機能が回復したらしい。この音がまたたまらなく快感なのだ。魚の勢いに任せて、ドラグの音を楽しみながらサケを取り込んだ。

ドラグの音を響かせながら何度もやり取りする快感がたまらない。

先程のウキを付けたまま沖に去ってしまったはずのサケが、百mほどの沖合で左右に走り回っていた。そして、その赤いウキが徐々に仕掛けが届きそうなところまで近寄ってきたので、息子が使っていた竿（本来は私の道具）を分捕ってその赤いウキに向けて飛ばした。その赤いウキがウキフカセのドングリウキ付近に纏わりついて、竿が引かれた。上手く仕掛けどうしが絡んだようだ。ルアーを咥えたまま三十分ぐらいも沖に漂っていたにしてはなかなか力強い引き込みだ。時間をかけて手前までようやく引き寄せるとハリがサケの背びれに掛かっていることが分かった。道理で引きが強いはずだ。慎重にやり取りしていたのだが、もう少しで手が届くところで背びれからハリが外れてしまった。しかし、ウキとルアーは回収することが出来た。それを最後に引き上げることにした。片付けをしている最中に、沖に出ていたサケの塊がまたまた河口付近に戻ってきたのだが、もう未練はなかった。

二年前は一年に一度の釣行でサケを爆釣した。しかし、この時は、道糸が簡単に切れてしまうという大失態を犯してしまった。古い道糸を使っていたのだ。その失敗に懲りて昨年新しい道糸ＰＥ二号に替えてあるので、絶対の自信があった。今回、露頭岩の向こうに鮭に走られて道糸を切られてしまったが、これは露頭岩ばかりの所為ではないと思われる。隣とのオマツリがあったのだ。隣が掛けたサケが、私の目の前を通過して道糸を引っ張って行ったのだ。サケは無事に釣り上げられたが、その時に道糸がゴロタ石に擦られていたと思うのだ。息子が使ったナイロン四号も古いものだったが、丁寧にやり取りすれば切れ

ることはなかった。釣り人が少なかったのでそれもできたのだが・・・。
「釣った魚は必ず持ち帰りましょう」の看板通りに持ち帰ったサケの始末のことである。銀ピカもあるし、ブナがかったのもあるし、オスとメスもある。女房に話すと「銀ピカのイクラの入ったメス二本だけ残して後は隣近所に配ることにしましょう。あなたはいい恰好しいで、いいものを選んでは他人様にあげてしまうんだから。前回は銀ピカのメスばかりあげてしまって、我が家にはブナがかったオスばかりだったでしょ。先日、イクラを買ったら、ひと腹で二千円近くもしたのよ。」と宣う。
その言葉を無視して、まずは息子の友だちにもらってくれるかを確かめてもらったところ、すぐに引き取りに来た。父親が秋田の男鹿半島出身で魚には滅法目がないとのことである。息子には雌雄の区別はつかないようだったが、一番よさそうなものを選んで持たしてあげていた。
次はお向かいさんだ。後片付けをしていると、ちょうど旦那が庭に出てきたところだったので声を掛けると「前回もらったものは、生きのいいメスでイクラの醤油漬けにしたら非常においしかった。身も真っ赤で脂が乗っていた。今週の日曜日に浦河港を出てヤナギノマイを釣りに行ってくる。お返しを期待していて下さい。」と言いながらクーラーの一番上にあった銀ピカのオスらしきサケを持って行った。彼は船釣り専門で、いつも宗八やイカをもらっているが、アブラコやカジカは食べないと言うので、ホッケやサケをお返ししていたのだ。
隣にも一本持って行ってもらおうと声を掛けたが、奥さんの実家が雄武の漁師で、送ってもらったばかりなので処理しきれないようだ。この時期なので立派なものが届いていると思われる。
職場にいるたった二人の女子職員にも声を掛けると、勤務が終わってから取りに来てくれた。二人ともまだ若く、彼女らに魚を捌くのは無理と思っていたが、彼女らの父母の年代でも駄目なので、それぞれのお婆ちゃんやお爺ちゃんに頼み込んで処理してもらうことになったらしい。
残りの三本は、自宅用に捌くことにした。三年物の小さなオスを捌いていると、女房がさっそく鉄板を出してチャンチャン焼きにしてしまった。さらに三年物のブナのかかったものを捌いてみると、メスだった。イクラはかなり成熟しているが、女房が「これが欲しかったのよ」と酒の割合の多い醤油漬けにしてしまった。イクラの皮が硬いのではないかと思ったが、食してみるとまったく違和感がなかった。最後に残った少しブナがかった大きなオスを捌いてみると、肉が真っ赤だった。こいつは焼き物にするので切り分けて欲しいと女房に言われて出刃を持ったが、切り口から脂がじわーっと滲(にじ)んできて手がギトギトになってしまった。
一年に一度はサケ釣りをと思っていたのだが、十月三日の平日に休暇を入れたシフトに組み直した。すると女房からは、看板にあった「釣った魚は必ず持ち帰りましょう」に反する嫌な言葉が発せられた。「今度は、サケのイクラだけを釣ってきてぇ〜〜〜。」

ウキの灯り

暗闇に浮かぶウキに付けたライトが個性豊かになってきた。自分のウキを見分けるためらしい。ケミカルライトのグリーンが一般的だったが、赤や青、そしてチカチカト発光するＬＥＤにリチウム電池内臓式のものも多くなってきた。デンケミというらしい。それに対応するウキのバリエーションも増えてきた。私が使っている遠投用のドングリウキはケミ２５㎜や３７㎜で対応してきたが遠目が効かない。ウキルアー用に買った発泡スチロール製のものは５０㎜対応になっているので、これはケミでも比較的視認性がよい。今回、ウキフカセ用に棒ウキタイプのものを用意していったが、試すことはできなかった。次回は是非それを使ってみようと思う。

ブルーライト・ハシベツ
作詞　橋本淳　作曲　筒美京平　唄　いしだあゆみ
替え歌　鹿島釣狂

ウキの灯(あか)りが　とてもきれいね
ハシベツ　ブルーライト・ハシベツ
息子とふたり　幸せよ

いつものように　豪快な引き込みを
ハシベツ　ブルーライト・ハシベツ
私にください　あなたから

飛ばしても　流しても　小舟のように
ウキはゆれて　ゆれて　あなたの海の上

シャケだけが　釣れて来るのよ
ハシベツ　ブルーライト・ハシベツ
豪快なサケ釣り　もう一度

あなたの好きな　潮の香り
ハシベツ　ブルーライト・ハシベツ
二人の世界　いつまでも